

# 甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2016

1号

通巻688号

松丘保養園の機関誌

国立療養所松丘保養園

もり

# まなびの杜

## 第1回 まなびの杜講座（2月27日開催）

2月27日に行われた第1回の講座では、松桜会（旧慰安会）賛助会員を含む総勢70名余が聴講。第1回目に相応しいハンセン病の歴史や遺品整理を通しての療養生活を学びました。



ハンセン病専門医 尾崎元昭先生による  
「ハンセン病医療半世紀の現場から」



元熊本現代美術館学芸員 蔵座江美氏による  
「ハンセン病療養所入所者の遺品整理からみえてくるもの」

松丘保養園では、各回テーマごとに講師をお迎えし講座を開催致しております。この機会に松丘保養園をご存知でない方、講座に興味のある方、ご参加されてみてはいかがでしょうか？

1回のみ受講も可能です。多数のご参加お待ちしております。（1回2回とも開催済みです）

第3回	4月23日(土) 9:30~12:30	1. この美しい森 松丘保養園の魅力と 緑の森プロジェクトについて	樹木医	逢坂	淳
		2. 入所者とともに桜苗木の植樹			
第4回	5月28日(土) 9:30~12:30	1. 伝聞 松丘保養園初代園長 中條資俊について	松丘保養園松桜会	理事	中條 資則
		2. 松丘保養園の現在	松丘保養園	園長	川西 健登

無料講座です

## お申込み／お問い合わせ

〒038-0003 青森市大字石江字平山19

国立療養所松丘保養園 福祉室 TEL 017-788-0145 FAX 017-788-0148

主催 一般財団法人松丘保養園松桜会

---

## 甲田の裾 平成28年1号 通巻688号 目次

---

春近く .....	国立療養所松丘保養園 園長 川西 健登	… 2
平成28年度を迎えて .....	入所者自治会 副会長 佐藤 勝	… 6
「隔ての土塁から共生の遊歩道へ」 ～「土塁」の試掘調査に関する覚書～ ..... 国立ハンセン病資料館 学芸部長 黒尾 和久		… 8
松丘盲人会のあゆみ(2) ～盲人会発足62周年を迎えて～ ..... 松丘保養園盲人会 神戸 文子 倉内 真紀		… 18
随想 <small>いちもくいつそう</small> 一木一草あれやこれや(8) 一初の病棟勤務で出会った人々ー .....	滝田 十和男	… 23
短歌 白樺短歌会 .....		34
最後の同級会に出席して .....	三浦 喜美子	… 36
松丘保養園松桜会よりのお知らせ .....		39
野の花の微笑み(14) .....	比良 信治	… 40
人事異動・自治会日誌・編集後記 .....		44

表紙写真：福祉室 太田 辰也（平成26年4月撮影）  
写真提供：福祉室

「甲田の裾」バックナンバー（平成24年1号～）は  
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ  
<http://www.nhds.go.jp/~matuoka/>

# 春 近 く

国立療養所松丘保養園 園長 川 西 健 登

二〇一六年も早三月半ばを過ぎ、気温が上がり明るい陽光に雪も解けて残雪の上を冬眠から出てきたリスが跳ねています。園の上を鳴き交わしながら飛ぶ白鳥の群れもそろそろ北に帰ろうとしているようです。昨年春に植樹した八重桜の苗木は一冬を越して新しい芽を天に向かって膨らませています。園の正門の近くにしっかりと立っている「天の川」という品種の八重桜は昨年百歳でこの世の生を終えられたMさんが五月にさくら保育園、藤保育園の園児と植えられたものです。

そのMさんは亡くなる半年ほど前、予想される終末期の医療について意思確認をしようとする私の質問には直接答えないで、ただ「先生、治して下さい」とはつきり言われました。百歳を越えて尚、生きるということに対する直截ちよくせうな真剣さに自らの医療に対する姿勢を根底から徹しく問われるような気がしました。

昨年三月に逝かれたSさんは亡くなる四時間程前、居ずまいをたたくようにベッドに身を起こし、傍らに座る私に対して振り絞るように「最高に幸せな人生、だつたと思います、ありがとうございます」と言われました。私はその言葉に驚き、肅然とさせられながら、それが私への決別の挨拶であるとも解らず、返す言葉がありませんでした。なぜあの時「ありがとう」ございましたは私の方です。至らないことばかりでしたが、ここでSさんに出会い主治医として診させていた、だいてほんとうに幸せでした」と申し上げなかつたのか、悔やまれてならないのです。この方々に限らず保養園みなさんは最期まで毅然としておられました。並大抵のご苦労ではなかつたでしょう、それぞれの生涯で身につけられた揺るがない自立の精神と矜持が感じられました。

このように一年を振り返りますと、入所者のみなさまに助けをいただながら、職員一同力を合わせ

て九名の方々を送らせていた、だきました、その方々の生涯の重さにあらためて圧倒される日々でした。

保養園では昨年度から、亡くなられた入所者のご生涯を思い起こしながら、医療とケアにおける私たちの関わりについて振り返るデスカンファランスを看護課が中心になり多職種参加で行っています。最近、ある入所者のデスカンファランスに息子さんが参加して下さいました。お父上が亡くなり、もう保養園に来ることはないと考えておられたようですがご協力下さいました。その息子さんは昭和二十九年、小学一年の冬に、親族会議の決定により、本当は別れたくなかったという母親と離婚して入所する父親に連れられ、五歳の妹さんと一緒に保養園に来て未感染児童のための保育所に入り、そこから地元の小・中学校に通いました。育ち盛りの大切な時期に同じ敷地内でありながら患者である父親の保護から切り離され、当園の保育所でも地元の学校でも、職員や教師らの無理解や心ない言葉に傷つけられ大変苦勞をされたそうです。「思い出したくない嫌な思い出」として多くを語られませんでした。息子さんは

高校を卒業後、保養園から母親のもとに帰り、ハンセン病に理解のある奥さんとご家庭を持ち、やがてご自分の子供や孫を連れて保養園の父親に面会に来られるようになりました。そしてその後も妹さん共々定期的に来園し最期までお父上を看取られました。そしてご遺骨を、入所前に離婚されおひとりが高齢まで生きられたご母堂のお墓にいつしよに収められたそうです。父親の発病と入所によってご家族のみなさんが深い傷を負いながら、長い別離を乗り越えて再び一つになるまで六十年を越えるご苦勞とご忍耐、そしてご家族の絆の強さに心を打たれました。

私はこの方のお話を初めて伺い、ご本人の了解を得てここに紹介させていただきましたが、多くを語られない入所者のみなさまとごご家族には、それぞれ容易に語る事ができないご経験をお持ちの者一、六五九名とご家族のみなさまが担われた苦難の生涯の重さは、私の想像を遙かに超えていて、ただ頭を垂れるしかありません。

Kさんは昨夏、ご自分の居室で独り亡くなられま

した。お葬式にご家族の姿はありませんでしたが、三ヶ月程経って最近五人のご姉妹方がそろって供養のために来園されました。九十六歳のご母堂が故郷で健在でいらつしゃるとのことでした。ご家族のみなさんがご兄弟を息子さんを想わない日はなかったことでしょう。ハンセン病に対する社会的な排除の力はいまだに根強く残っていると考えざるを得ないのです。しかしその方のお葬式には沖繩から東京から、学生時代からの親友である療友が駆けつけ、現在、全療協事務局長であられる藤崎陸安さんは友人として心のこもった追悼を語られました。新良田高校での同級生ご夫妻も彼が亡くなる前後に長島愛生園から二度来られました。青森空港で「また来いよ」と見送った彼は、血縁のご家族と離れながら、どれほど親友の訪問を喜ばれたのか、如何に強い友情に支えられて豊かな交わりに生きてこられたのか、私は初めて知らされました。

松丘保養園で亡くなられる方の枕辺にはいつも何人もの入所者のみなさんが駆けつけ、ベッドを囲んでお顔を近づけ、語りかけながら看取られます。私ども職員はこのように入所者のみなさんに支えられてケアさせていただいています。有り難いことです。

無縁社会などと言われ、都会でも地方でも独居で一人淋しく亡くなる人も珍しくない今日、長く差別され隔離されて来たハンセン病療養所で逝かれる療友を看取りあう入所者のみなさんの姿にはいつも胸を打たれます。

昭和六十二年に入所者自治会が中心となって松丘保養園緑化委員会が設置されました。その中心にあった福島政美さんは「やがて青森市の郊外にあるこの保養園に住む人がいなくなる時が必ず来ます。その時のことを今考えようとしています。明治四十二年以来、お世話になってきたこの土地に、病み求めることばかりで与えることをできなかった私達であります。青森の名にふさわしい緑を地域住民、青森市民の為に、市民の憩いの場として、松丘に森を残すことができました。どんなにか素晴らしいことであろうかと思えます」と書いておられます。

その福島政美さんと伊藤文男さんが還暦記念に地域の子供たちのために植えられた栗林は地域開放のひとつのモデルとなり、毎年地元の小学生が自然体験学習で栗拾いに来て歓声を上げています。現在、緑豊かに残されている松丘の森は、このような入所

者の高潔な精神と心ある市民のみなさんや諸団体の働きのお陰です。

私たちはこのような入所者の貴い志を継承させていた、だいたいと考え、「松丘の森プロジェクト」構想のもとに活動を始めていくことにしました。その目的はここ松丘保養園で亡くなられた入所者の方々の記念して一、六〇〇本余の苗木を現存する入所者と地域住民が一緒になつて植樹することです。昨春は日本花の会や青森ロータリークラブのご援助と、樹木医逢坂淳さんのご指導によつて、八重桜の苗木五〇本を入所者のみなさんが地域の町内会の方々と、さくら保育園、藤保育園の園児と一緒に植樹し、その第一歩を踏み出すことができました。今春は八重桜一五〇本を植樹する予定です。浪岡で独自の農業を実践しておられる福土武造さんはボランティアとして中央センター中庭で大豆栽培をして下さり豊かな緑と収穫の喜びを共にさせていただきました。入所者の田中春男さんはさくら保育園児に大根やジャガイモ畑を開放して農作業保育に貢献して下さいます。

根岸章さんは昨年五月にご自分でシニアカーを運転して新城中学校の体育祭を観戦に行かれました。

初めてのご経験であつたそうで大変うれしい驚きでした。白樺コンサートに行かれる入所者が生徒さんの励みになつていくということも喜ばしいニュースでした。

このように松丘保養園と地域との交流は、これまでずっと入所者のみなさんが勇気をもつて率先して切り開いてきておられます。私たち職員はその道を少しでも広く確かなものにするために全力を尽くさなければなりません。

残念ながら松丘保養園の歴史において、いや最近も、入所者の尊厳が侵害された事実があります。私たちはこの歴史と事実を踏まえ、私たちが犯した過ちを痛切に反省いたします。諸機能が低下している高齢者に対しては、より高い質の医療とケアが求められます。私たち職員は、かつて人権侵害が行われたハンセン病療養所であるからこそ、なおさらここで最高水準の倫理性に裏付けられた医療ケアを実現しなければならぬと深く決意しました。今年もその目標に向かって力を合わせて行きたいと思ひます。

# 平成二十八年度を迎えて

入所者自治会 副会長 佐藤 勝

平成二十七年度は、会員の皆様方また職員の皆様方の温かいご指導とご協力を賜りありがとうございます。お陰様にて昨年度も無事終えることが出来ましたことを、衷心より厚く感謝申し上げます。

二十七年度の自治会の一年を振り返ってみますと、平均年齢が八十四歳を超え、高齢化と健康度の低下が一段と進み、長年続いておりました地区連絡係制度も廃止に踏み切らざるを得なくなりました。自治会役員も今現在三人体制で維持しておりますが、今後も厳しい状況が続くことになりはなりません。とは言え会員の皆様の療養生活に支障を来さないように、施設側と相談しながら運営するのが自治会の使命と考えております。

そのためには、まず優先すべくは医師の充足であり、

特に昨年度で退職された副園長の後任の確保については、厚生労働省と施設側で努力していただきたいところです。また看護師の充実は当然ながら、介護員の充実は現場の実態を踏まえながら万全を尽くしていかねければなりません。なぜなら一人の入所者に対し、入浴、おむつ交換あるいは着替え等に二人もしくは三人、場合によっては四人必要なことがあるからです。まさに、ハンセン病療養所の現実であります。

このようなことは今後、益々顕著になって来るものと思われれます。

らい予防法廃止から二十年、らい予防法違憲国賠訴訟の熊本判決から十五年、なおかつ終わりなき運動が今年も続くと、全療協会会長が全療協二ユース新年号で言われているように、我々に残された時間はそう多く



はありません。残された諸課題の解決を関係者のご協力をいただきながら急がなければなりません。

さて、平成二十七年中、松丘では九名の方々の旅立っていかれました。よって九十一名になってしまいました。高齡化と障がい度が進む中にあつても、施設側、特に看護課などのご協力のお陰で買い物ツアーや外食などする楽しみも増えて皆喜んでおります。

昨年は地域住民との交流が盛んに深められた年でもありました。

例年、近隣住民の方々のご協力を得て、観桜会の前に園内クリーン運動を行つていますが、昨年四月は町会の皆さんと一緒に桜の苗木を植樹してはどうかと施設側の提案があり、実施することとなりました。

当日は生憎の雨模様でしたが、予想を遙かに超える近隣町会の皆様の参加を得て、参加者と入園者が雨の中一致団結して無事植樹を終えることが出来、関係者一同安堵したものでした。

今年も桜の苗木を植樹する計画がありますが、心配されるのは植樹の後の病害虫対策です。万全にしていくことを施設側と協議しながら進めていかなければなりません。

そして、西側に位置する公園、此処はかつて花見や運動会など開催していた場所でもあり、思い出がっぱい詰まっている場所です。今は職員の手で草刈り、清掃を行つていますが、職員には他にもやらなければならぬ場所が多く、手が行き届かなくて苦勞しているようです。昔は我々入所者が、草刈りや落ちた木の枝、枯れ葉等を熊手などで集めたものですが、今は職員不足もあり手が回らない状態です。そのような状態ですから、元自治会長の根岸さんの指摘もありましたので、今年度はこまめに清掃していただくよう、関係者の方々には是が非でもお願いしたいところであります。

さらに今年には社会交流会館の新設工事が予定されております。此処には松丘の貴重な資料など展示して社会交流の場として活用し、多くの方々々と交流を深めて松丘の将来を考えていく予定です。

今年度も皆様方一人一人が健康で穏やかな一年でありますことを祈念しております。

# 「隔ての土塁から共生の遊歩道へ」

## 「土塁」の試掘調査に関する覚書

国立ハンセン病資料館

学芸部長 黒尾和久

二〇一五年八月二十八日。松丘保養園の川西園長からお電話をいただいた。受話器から聞こえる先生の口調はちよつと切迫した雰囲気であった。お話を伺うと、松丘保養園では、園と市道との境界画定をも目途として、一九〇九年の開園以来、園（われ）と地域社会（かれ）を隔ててきた物理的障壁である土塁を削平し、代わりに遊歩道を整備する計画「隔ての土塁から共生の遊歩道へ」を進めてきた。そして、その計画の進行過程で、少しだけでも土塁の姿を形として止めておくべきだという考えが出てきたのだが、実際にどうしたらよいか。土塁の全部あるいは一部を残すとしても、どの範囲をどのような形で残すべきなのか、北部保養院開設の当時に近い形に復元したほうが

いいのか、よく分からないので、助言がほしいとおっしゃった。お電話の直後にメールで送信されてきた図面や写真をみながら、私は、土塁のできるだけの保存を前提に、その上で遊歩道の整備を行うという原則論をお話する必要があった。急ぎ日程調整して九月四・五日に青森入りすることを決め、その直前まで先生とメールでの議論を重ねた。

川西園長が連絡をくださったのは、私がかつとも考古学の出身で、公立療養所の開設百年の節目、二〇〇九年の資料館企画展『隔離の百年』展において、全生病院に敷設された土塁・堀に注目、考古学的

川西園長が連絡をくださったのは、私がかつとも考古学の出身で、公立療養所の開設百年の節目、二〇〇九年の資料館企画展『隔離の百年』展において、全生病院に敷設された土塁・堀に注目、考古学的

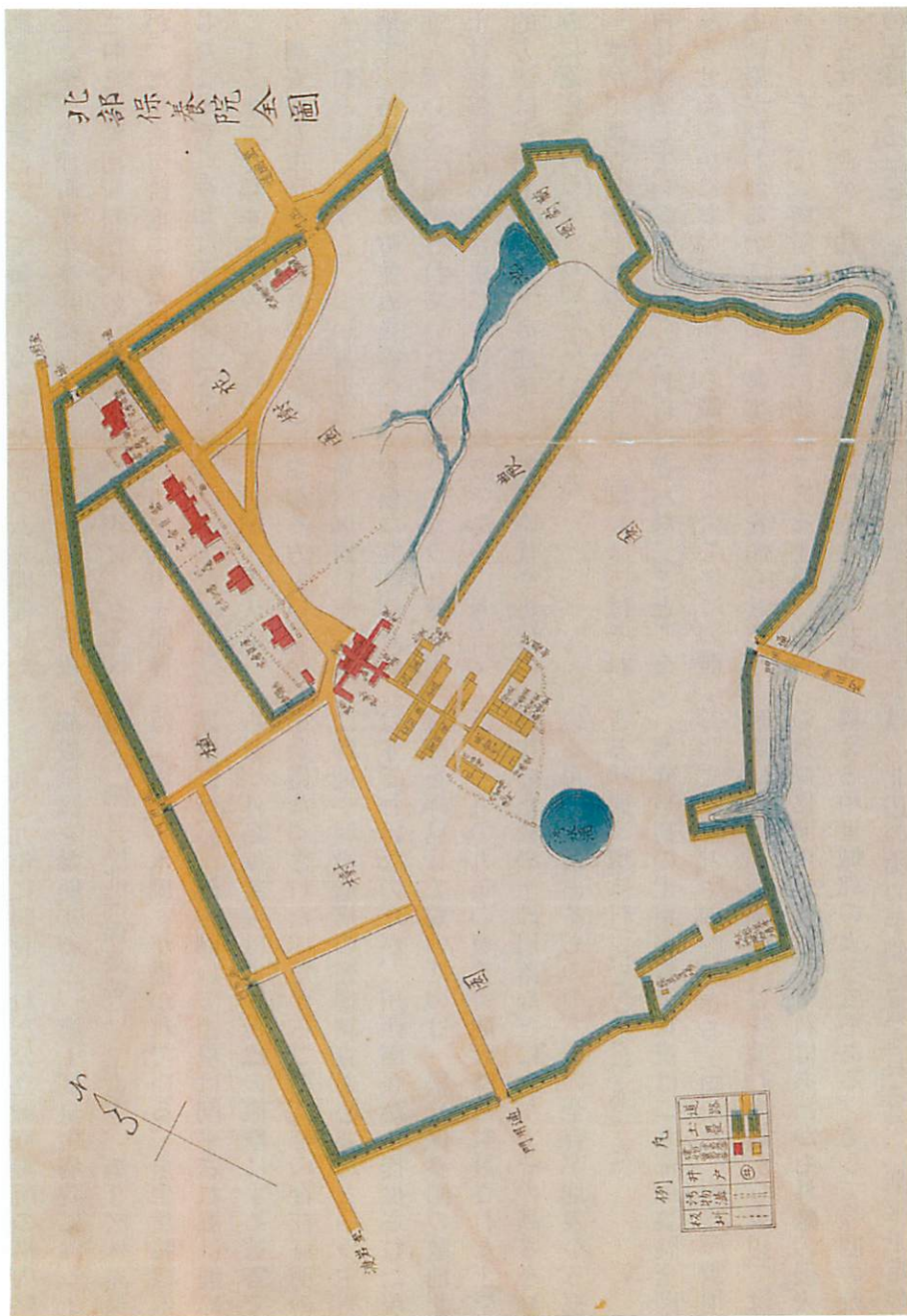
調査の意義について報告するシンポジウムを開催したことや、草津町栗生楽泉園内に二〇一四年四月に新設された重監房資料館内の「特別病室」再現に、私も関わった重監房跡地の考古学的調査が大いに威力を発揮したことをご存知だったからであろう。

ここまで小稿をお読みになり、二十世紀（現代史）の調査に考古学が役に立つのかといぶかる方もいるかもしれない。しかし、つい最近も広島原爆資料館の敷地で、被爆当時の町並みを調べる大規模な発掘調査が進んでいると報道されていた。被爆瓦やガラス瓶の出土は原爆被害のすさまじさを語る物証である。考古学的方法は、何も「記憶」の途絶した先史時代や古代のみに適応されるばかりではないのである。

確かに調査対象となる（もの）や（ばしよ）はそれ自体沈黙しているのだが、それらにどんな（こと）を語らせるのかにおいて、私たち調査者（ひと）の歴史認識が問われるのである。被爆瓦に何を語らせるべきか、そして「隔離」の歴史の物証である土塁に何を語らせるべきか。私たちには次の世代に伝える「共通の記憶」（こと）を紡ぐ義務がある。

一九〇九年に開設された公立癩療養所の構内略図や施設全図を参照すると、第1区全生病院には「土塁・堀」、第2区北部保養院は「土塁」、第3区外島保養院は「堤防・水堀」が描かれている。全生病院は敷地の拡張に伴い一部を除いて土塁は削平され堀は埋めたてられ、外島保養院は室戸台風の直撃による被害で移転を余儀なくされた。だからこそ、その存在証明のために跡地や埋没遺構の発掘調査も必要だという主張を私はするわけなのだが、川西園長から提供された現況測量図を拝見して驚いたのは、松丘保養園の敷地北辺には、一九〇九年の療養所開設時に敷設された土塁が、経年のための土砂崩落などによってその高さを減じている可能性はあるものの、その全容が地表から視認できる状態で遺されていることであった。

開園当初の土塁の敷設状況は「北部保養院全図」を参照することで理解できる（図1）。療養所敷地の外縁には土塁が一周し、谷を望む南辺から東辺では土塁の外側に河川が流れ、それはあたかも外敵の侵入に身構える中世城郭のようでもある。そして今回の遊歩道は、北辺の山の手側に造られるが、削平予定の土塁



(图1) 「北部保養院全圖」明治43年

は、一九〇九年に北部保養院として開設以来、大きな破壊を受けず奇跡的に遺存してきた貴重な歴史的遺構と思えた。

そのような遺構を遊歩道に改める積極性は「共生」という未来志向の考え方に重ねて高く評価できる一方で、「隔離」の物証である土塁という可視的な遺構を残し、向後の人権学習の道具とする意義についても十分に配慮する必要があるに違いない。土塁のすべてを無くしてしまえば、「共生」の意義も、「隔離」の事実もいつの日か忘れ去られてしまう危険がある。

川西園長には、ハンセン病問題基本法第十八条に照らして、療養所に遺された土塁のような可視的な遺構もまた「歴史的建造物」と認識して、それを「記憶の場」として保持することの大切さについて説明するとともに、『隔離の百年』展の際に「北部保養院全図」を観て以来、私が抱いてきた「全図」に土塁のみが描かれている違和感についてもお話した。もともと「全図」の北辺の土塁にも空堀が伴っていたが、それを「全図」に描くことを省略している可能性はないのかと、私は疑って来た。なぜならば、土塁は堀とセット

になって、我（われ）と彼（かれ）を隔てる障壁としての機能を充実させるのが普通だからであり、この機会に堀の存否を確かめてみるべきだと思つた。

そこで川西園長には、今回対象となつている北辺の土塁にも、空堀が伴うのか、可能であれば調べておく必要がある、古い文献・図面・写真などで確認できなくても、堀が実在のものであれば土中に埋没しているので、簡単な試掘調査でその有無は確認できますと進言した。

するとしばらくして応答があり、「ある入所者に聞きましたところ、確かに堀は在つたようです」とおっしゃる。「内側に堀を掘つてその土を盛り上げて土塁を築いた。昭和十二年に入所したときには既にあった。土塁は人の背丈を超えるほど高いものではなく、石垣もなかった。毎朝、土塁の上を入所者が行列を作つて散歩するのが日課だった。土塁から外に出ると大人の入所者に出てはいけなさと注意された」と、その方は述べられているというのである。

土塁の内側に堀があつたという情報には意表をつかれたが、それを朗報とした。かりに外側に堀が遺存し

ていた場合は、土塁に接して併走する市道下に埋没している可能性があり、そこを試掘するには道路管理をしている青森市との調整手続きが煩雑になる。しかし内側に堀があるのであれば、園の敷地内になり試掘も容易に行えるからである。

川西園長には、今回は土塁の内側に堀が実在するか、試掘を行なってみるべきである。もしも堀が埋没しているのならば、今後土塁を保存する部分において堀の発掘調査も行ない、土塁と堀のセツト関係を再現し、その状態を「史跡」として保全するのが良策でしょう。また遊歩道の整備に伴い土塁の現状を変更するのであれば、その事前に土塁の簡易測量を実施、現状を記録化することも考えるべきで、その事前に堀の有無について試掘調査を行えば、善後策もたてやすい。これらについて現地踏査を踏まえて、ご相談できると良いですねと回答した。

九月四日、十五時前に松丘保養園を訪問した。菅事務長の案内で、敷地の北辺に遺存する土塁の残存状況について現地を視察した。土塁の遺存状態は思いのほか良好であった(写真1)。部分的には一m五〇cmの

残存高を測る場所もある。想像以上に良い土塁の遺存状態に驚きながら、一時間程の踏査を行い、宿舎に入って明日の川西園長との打ち合わせに備えた。

翌五日、午前九時から川西園長、菅事務長、石川入所者自治会長等による会議の場で、私から次の提案を行った。その提案とは、①土塁は測量調査を行ない可能な範囲で現状を保存すること。②土塁の内側に堀が併走しているのならば、埋没している堀の上に遊歩道をつけて土塁を保存したらどうか。③遊歩道から土塁を断ち割り生活道路にアクセスする枝道を適所に用意し、土塁を破壊する部分に関して考古学的調査を行なえばどうかということであった。

私の話を聴いた川西園長は、「隔ての土塁」も「記憶の場」として残し、なおかつ「共生の遊歩道」も実現するという課題に取り組む観点から、事態の推移によつては設計変更をも視野にいった迅速な対応をするよう菅事務長に指示し、十一時には設計事務所の責任者も同席して打ち合わせを行った。設計担当者は、なるべく土塁を保全する考え方に理解を示し、堀の上遊歩道をおくように設計変更を行う場合には、土塁の



(写真1) 土塁の残存状況

範圍、とくに内側ラインを決めてもらいたいと要望した。

土塁の内側ラインを決めるには、試掘トレンチを入れて、堀の有無にあわせて、地山の堆積状態を確認することによって測量図におとすことができる。そこで、既存の設計用測量図面の土塁の断面ポイントにあわせるかたちで任意に試掘坑（ミニバック使用）を掘り、その断面において私が、堀の有無、土塁の構築状況などを観察して、その結果をもってさらなる対処法について協議を行うという段取りになった。

その後、東京に一旦戻った私に、菅事務長から、試掘坑は工事業者と打ち合わせをして1m幅で2mの深さで六カ所を設定して、十日の一日で作業を終えるので、この日に合せて断面観察作業をお願いできないかと連絡があった。さらに七日に行われた厚生労働省担当官との打ち合わせについての報告をも頂戴した。

打合せでは、土塁を全て残す可能性、遊歩道を土塁の内側に敷設する場合の問題点などが議論されたようである。その結果、土塁内側に遊歩道を作ると、冬期に樹木から雪や氷の塊が落下する恐れがあり、歩行し

ている人に危険がある。安全性を確保するには、さらに樹木を伐採する必要があるが、松丘の緑を残すことが、入所者の希望であり、これ以上樹木の伐採は難しい。さらに伐採にあてる費用の捻出も困難で、この問題をクリアするためには、やはり当初の予定通りに、一部の土塁を残すにとどめる方針で遊歩道を整備することが確認されたとのことであった。

この時点で私は土塁の全てを残すことはやはり難しいことを察したが、菅事務長の連絡にしたがい十日の午後に作業助手一人を帯同して、松丘保養園に入り、試掘トレンチの断面について観察・記録する簡易調査を実施した。測量器材・実測用具などを整え、菅事務長と合流し、前出張時の打ち合わせに基づき、あらかじめ業者が重機で掘削されている土塁内側に直交するように設定された六本の試掘トレンチの断面観察に取り掛かった。

最初に確認したのは土塁内側に堀が存在しているか否かであった。しかし残念なことに、いずれの試掘トレンチ断面においても堀は存在しなかったことが明白な状況であった。そして土塁内側の土層堆積状態の



特徴が、非常に薄い表土層の直下に黄褐色のローム質土層がすぐに露出する点にあることを視認した。

通常は表土下に厚く暗褐色土層（新規テフラ）の堆積があり、これが縄文時代以降の文化層に相当するわけだが、それが今回の試掘では全く失われていたのである。したがって松丘保養園の開設時の土塁の構築は、土塁内側の表土と暗褐色土層そして一部ローム層をまとめて削平し、集められた土を盛って行われたのだと考えられる。中世城館などで土塁の内側の郭（くるわ）の表土をはぎ取り、より高く土塁を築く工法がとられていることがあるが、それに通じるあり方がそこに認められる（図2・写真2）。図と写真から読み取れるように、表土・暗褐色土を削いで、造成土と盛土で土塁を構築した結果、土塁に沿う内側が若干窪んでいるような状態になったようで、入所者はそれを「堀」跡だと認識したのではないだろうか。

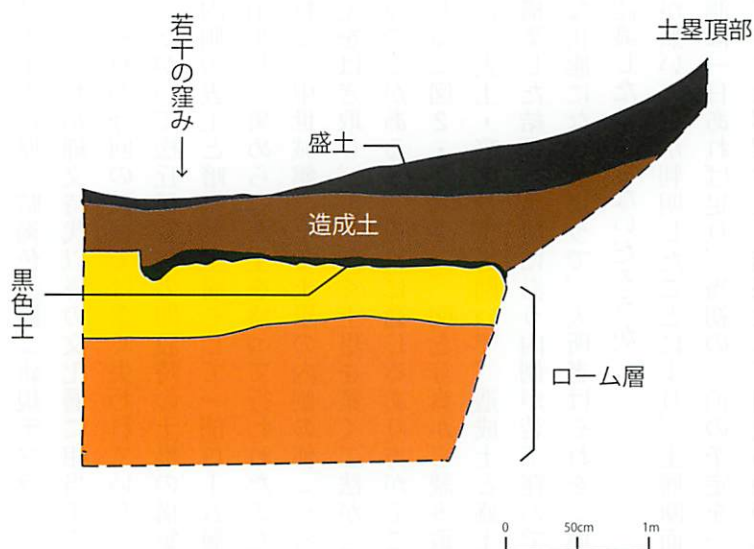
堀が無いことが判明したことにより、土層断面の簡易実測は一日あれば足り、当初の二泊の予定を一泊に短縮することができた。結果として開設当時の「北部保養院全図」に土塁しか描かれていないのはそれが実

態であったからという印象を強くしたのだが、依然として土塁の外側の市道下に堀が眠っている可能性は残されている。市道下を調査することが困難であるならば、今後は地点を変えて土塁の外に堀が伴うのかを確認する機会が訪れることを気長に待つしかない。

土塁に堀が伴っていれば、土塁が削平されてしまっても、考古学的調査によって埋没した堀を発掘することによって、我と彼を隔てた障壁を完全ではないが可視化することができる。しかし、かりに土塁しか構築されていなかったとすれば、いったん土塁を破壊してしまえば発掘調査を行なっても可視化は難しい。

松丘保養園には土塁のみが構築されていたと仮定するならば、百余年以上遺されてきた土塁はやはり非常に貴重な「記憶の場」ということになる。今後の課題として「全図」に照らして保養園内をくまなく踏査して、現状で視認できる土塁またはその痕跡を現況の地図上にマーキングしておく必要があるだろう。

試掘トレンチの断面調査の結果をうけて、十一日午後には松丘保養園の施設整備委員会が川西園長を座長に招集され、私もオブザーバーで参加した。会議では懸



(図2) 土壘とその内側の土層堆積状況



(写真2) ミニバックによる試掘坑の設置状況

案になつてゐる土塁を削平し、遊歩道を設置するといふ園内整備事業について話し合いがもたれた。

私は今回の試掘調査の結果として、①土塁の内側には堀は存在しないこと、②したがつて土塁の保全、とくに内側については、現況の残存土塁の際をもつて境界とすべきであることを報告した。③そして土塁に堀が伴わないのならば、園の外と内を隔てる境界として奇跡的に残つてきた土塁の価値はさらに高くなり、できるかぎりの現状での保全措置がとられるべきであると相変わらずの主張をした。

私の提案に対して、すべてとはいかないが、予算の許す範囲内で土塁を残し、他方で樹木の伐採もなるべく行わないように配慮した遊歩道の整備事業を行うという合意形成がなされた。この決定を了とすべきだと私も思った。お電話をいただいたからわずか二週間である。

会議後に川西園長から、これからも国立ハンセン病資料館には、園内の史跡保存や活用の問題について、いろいろと支援してほしいという要請をいただいた。非常に光栄なことである。それを受けて二〇一六年度

に実際に土塁の破壊が余儀なくされる部分において、可能な限りの考古学的調査による記録保存をするのが良いと付言したところ、問題は調査経費をどう捻出するかということになり、川西園長は、園の予算での措置の可能性も考えたいと述べて、石川自治会長も厚生労働省への単独陳情などで交渉すると発言した。私も折に触れて支援・助言を行うことを約束した。

今回、私はハンセン病療養所の土塁の試掘調査という貴重な体験をさせていただいたことになるが、それも川西園長をはじめとした松丘保養園のみなさんのお導きのおかげであつた。それにしても「隔ての土塁から共生の遊歩道へ」という意義のある整備事業が、どのように具体化するのか、今から楽しみである。

# 松丘盲人会のあゆみ(2)

## 盲人会発足六十二周年を迎えて

松丘保養園盲人会

神戸文子  
倉内真紀

「松丘盲人会」の前身である「杖の友会」は結成時に七つの部を創立し、様々な活動を始めました。組織として不可欠な「経理・庶務・渉外部」をはじめ、会員達の日常の潤いを目的とした「娯楽・文芸部」そして盲人会発展の要となるのが前号で紹介した「点字部」と、「マッサージ部」でした。そこには点字を習って聖書や書物を読みたいという希望、マッサージを覚えて他人の役に立ちたい、それが自分たちの生きがいや誇りとなるだろうという強い思いがあり、そして、その信念が会結成への奮起につながり、六十二年という歴史が始まったといって過言ではないでしょう。今号では「マッサージ部」について、残された記録よりまとめられたものを紹介します。

マッサージ術の習得

昭和三十年九月下旬、予てから強く要望していたマッサージの講習が、いよいよ園当局から正式に認められた。この講習会が誕生するまでのいきさつの陰には、マッサージの大御所である木村兼作先生がいた。先生は遙々、基地の町、三沢市から個人的に盲人会を時々訪問されて、マッサージの手ほどきをしてくれた。先生は青年時代から眼病勝ちで、治療を続け何度も手術をしたが、思ったより芳しくなかったと語っていたが、独り歩きできる程度の視力をもつておられた。従って、自分の生きる道は、盲人の職業である鍼灸按摩であると決心して盲学校に入ったという。先生はよく「我々盲人は、たとえどこで暮らそうと、マッサージくらいは身につけておいて損にならないし、

又、邪魔にもならないからあなた方も早くマツサージ

を習いなさい」と励ましてくれた。そして誰彼を問わず、「マツサージはこんな具合に」と肩をもみ、手足

をさすつて手ほどきされたのである。ハンセン病患者の自分たちにためらうことなく普通に手をかけているのに驚き、その態度と心に感服した我々は、本格的にマツサージを習いたいと講師の招聘を熱望し、いよいよ実現することとなった。

講師は、すっかり顔馴染みとなった、県盲人協会の副会長である、加藤正八氏が快く承諾され指導して下さることになった。しかし、まだ会館を持たなかった会では、図書館や火防団の詰所を借りて受講することとなった。部分マツサージから全身マツサージ、鍼の打ち方などが教授されたが、先生と生徒はお互いに試験台になりあつて、それはそれは真剣そのものであり、中々賑やかなものであつた。受講生たちの意気込みはたいしたもの、疲れも知らぬげに、部屋に戻つてからもその日の復習を怠らなかつた。そして九名の受講生はめでたく第一次講習の修了式を迎える。二十回の講習だけで完全にマスターできた訳ではなく、一応の手ほどきを受けたことに過ぎないが、画期的な技

術の習得の一步であつたと思う。

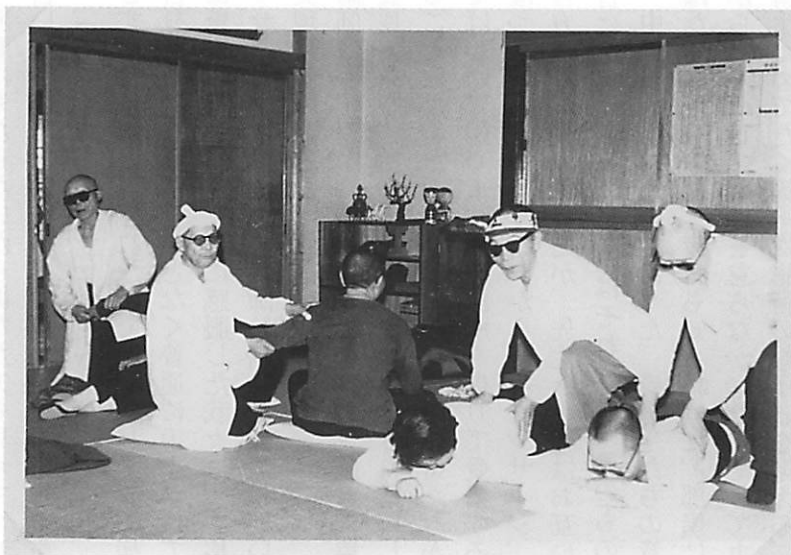
### マツサージの奉仕

講習は引き続き行われ、昭和三十三年までの三年間で合計四十五回となる。

昭和三十一年に入つてまもなく、マツサージ部員九名が集会を開き「私達盲人は常日頃、晴眼者の世話になることが多いから、この際マツサージの奉仕をしようじゃないか」という話になった。そして「一、二病棟の入室者を対象に晴眼者、盲人の区別なく無料奉仕をしようではないか」と全員一致で話が決まり、部員達は日曜祭日を除き、毎日午後から二手に分かれ世話係の上屋敷氏を案内役にしてマツサージ奉仕が開始されたのである。回数を重ねる毎に希望者が増え毎回十五名から二十名を超える盛況ぶりであつた。

このようにしてマツサージ部員の腕は磨かれ、人気も高まつてきたことにより、昭和三十三年四月、園内七草寮大部屋において「按摩療法所」を開設した。そして、マツサージ部員四名が日曜祭日を除く毎日出勤することとし、施術料は一時七円、出張は十円とした。文化部より支給となつた白衣を着用してマツサー

ジを施している写真が一枚残されている。



按摩奉仕を行うマッサージ部員たち（昭和35年頃）

昭和三十四年の暮れに盲人会館が新築されてからは、午後から盲人会館で行い病棟回りの出張治療も交代で行われ、マッサージ部員の活躍は長く続いたが、園内作業が職員に切り替わり身体的負担が軽くなったことや、医学の進歩などから、療友達の健康状態が良くなったためか、次第にマッサージの希望者は減少していった。記録では昭和四十八年以降、マッサージ部は存在しなくなった。

#### マッサージ部員の声

園内の皆から喜ばれることを励みとして努力してきたが、如何にもマッサージ術は重労働であり、部員達の体力の消耗は甚だしいことも事実であった。しかし、病の重い他の入所者にマッサージを施し大変感謝され、それがまた部員達の大きな喜びとなり生きがいとなったことも事実である。

それは、当時マッサージ部長であった村元氏が点字機関誌「松丘」に残した次の文章からも読みとれる。

## 『私のよろこび』

昭和四十二年度 盲人会副会長 村元静一

眼が見えなくなったら、その行動範囲がぐつと狭まって、何をしたいのか見当がつかなく退屈な毎日が続き、又、運動不足に陥りがちになった。人と生まれたからには、何か職業らしいものを持たなければならぬし、又、何かを成すべきが本当であるとは知りつつも、中々良い知恵も出てこなかった。思案に思案を重ねたあげく今の私には此れ以外生きる道がないと思つたのがマッサージである。

昭和二十八年は民主主義発展の最中であつた。その余波が療養所にも押し寄せて時代の要求を勝ち取ろうと、自治会こそつて白鉢巻きに身を固めて騒がしい一時代であつた。私達の盲人会でも時代の波に遅れまいと、百余名の会員の中から比較的手の良い有志八名を以てマッサージを習得する事に相談が決まつたのである。私もその中の一人であつた。

以前から個々には按摩らしき仕事をしている人も居つたが、それは技術も基本もなくただ患部を叩いて揉んで事足りるという程度で、それはどこの家庭でも

見られる小さな子供が親の肩を叩いている姿そのままであつた。一人前のマッサージ師として身をたてようと希望に燃えている我々には到底満足し得ない幼稚な状態であつた。

再三にわたる自治会及び園当局との交渉により、講師招聘の段階まで話が進んだのであるが、一般社会人のハンセン氏病に対する偏見と認識不足等によつて中々良き理解者が得られず我々の要望も早や此までと思われた。この事情を知つたある方が講師の役を引き受けてくださる事になつたので、その時は天の恵みとは正にこの事であると喜んだものである。

講習所とてない私達生徒は図書館、火防団詰所、七草寮と何度も場所を変えつつ一心不乱となつて全神経を籠めて講義や実技に力を注ぎ、簡単な人体学、基本技術等を身につける事が出来たのであつたが、それまでには来る日も来る日も手をとり足をとつての熱心な先生の指導が続いたのである。

何時しか講習の三年の歳月は夢のように流れ去り、思えば長くもあり又短くも感じられたがとにかく、免許のない八名のマッサージ師が生まれたのである。

三十四年暮れには待望の盲人会館が建築されたの

で、木の香りの漂う大広間、そこが午後から私達マツサージ部の独占場となつたのである。環境の良さもさることながら、中には私達の腕前を試そうとする者もあつて、次第次第に治療を受ける人が詰めかけて来る様になつた。とてもとても捌き切れぬ程の目まぐるしい毎日であつた。お詫びして翌日に来て貰つた事も屢々であつた。

まだ未熟だつたのでヘトヘトに疲れて部屋に帰つたが、その疲労が甚だしくて「明日は休もうか」と思つたり「おい、誰か俺にマツサージをしてくれや」と言つて笑われたりしたが「フン、これくらいでへこたれるものか」と、我に鞭打つたものだが、辛いものは矢張り辛いと口に出してしまふのであつた。実は、此が我慢のしどころなのであるが……。長年療養生活を送つた者は、とかく最後の「ふんばり」が効かないと折に触れ聞いていたので、私はふとこの言葉を思い出してうなずいた。もう少しで、自分の不甲斐なさを世間へ晒すところであつた。それから私は心機一転「ふんばり」を持つて療養者にも骨のある者が居るのだと、しらしめてやりたいと思つた。

当時の疲労はおろか苦勞もどこかに去つて、今では

茶飲み話となつた過去のなつかしい思い出である。

重症棟には本病はもとより、余病に余病を重ねてベッドに横たわつて居る人々が居る。そつとさする如く揉んでやると、いとも満足気に大きな呼吸を繰り返して繰り返して投げかける。それは、しばしの間遠く離れた肉親のことも病の苦しみも忘れた、やすらぎの呼吸であろう。そんな時、私はマツサージを習得して居てつくづく良かったと思つたのである。

そして今日も六十九年ぶりと言われる積雪の解け出した悪路を杖を握つて重症棟へ通うのである。

(盲人会機関誌「点字松丘」昭和四十二年発行より転載)



## 随 想

いちもくいつそう  
一木一草あれやこれや(8)

— 初の病棟勤務で出会った人々 —

滝 田 十和男

昨年の年末の天候は、ここ十数年振りに雪の降らない日が続き、私の誕生日である十二月二十一日も穏やかな初冬の薄曇りの中、恥ずかしながら何事もなく満九十一歳の新たな出発の日を迎え、園内で一番多く高齢者の住む第一センターの食堂で、一つのテーブルに円陣を張った職員の皆さんに囲まれて、ハッピーバースデーと歌い囃されながら、目の前に用意された小さなケーキのローソクの灯りを吹き消す、セレモニ一の当事者となった自覚も覚束ないまま昼食どきを迎えたのであった。その直後である。市内桜川に住む青森アララギ短歌会を担っている。らつしやる竹洞早苗さんがお祝いに駆けつけて下さったのではないか！このところ数年もお会いしていなかったのに……と、この珍客に驚かされたが、昨年本誌に『一老人の誕生日寓話』なる一文を書かせ

て頂いたが、それを記憶されてのお越しと合点が行った。羊の可愛い縫いぐるみをお土産に携えてのご訪問に何とも言えない暖かさに包まれた一日となった。生憎この日は毎年恒例となっている市内の「聖マリア幼稚園」の園児達の園芸慰問があり、時間ダブってしまい、ゆつくりお話する暇もなく帰られて本当に申し訳ないことをした。と悔やまれないのであるが、頂いた羊の縫いぐるみは今では我が家の主然と納まり私の老後を見守るかのよう

に棚の上で座り続けている。

人間年齢を重ねるといふことは、それだけ自分の人生に責任を負わねばならぬことは勿論であるが、去年と比べてみて、わずか一年の間にこんなにも変わるものかと思うほど、いわゆる老化現象が進化してゆくのが分かる。

もともと私の聴力の衰えは今に始まった事ではないが、素のままでは完全に遮断されてしまい、辛うじて補聴器のお陰で何とか人々とのコミュニケーションが保たれていることは、有り難い事だと思っている。

それに糖尿病による顔面麻痺の脅威は、臉のたるみによる目玉の濁きを促して、四六時中チクチクと痛みが走る。これも中々始末に負えない厄介なものである。

そんなハンデにまみれながら、ペンを進めようとするのだから、どうせ碌なものしか書けない事は分かっているが、昨年あたりから各地の大学の先生方が松丘を訪問され、その都度、「貴方は入園者で一番古いのだから昔の事など知っていることを話してやってよ」と狩り出される事が多くなった。

「こんな老いぼれの話なんか、何の役にも立たないだろうに——」と思ひながら、付き合わせて貰っているが、實際口べたな私の説明は我ながらお粗末の一言に尽きる。

来訪者たちの関心は専ら戦前：戦後の時代にまたがる療養所の劣悪な状況のもと、患者の人権は如何

様なものであつたか、にあるようで、何の誇張もなしに話しているつもりでも現代の人達からすれば想像外の事が多いようで、私自身が体験したことの世界はそんなにも一般社会からかけ離れていたものだったのか、と改めて再認識しながら自問自答しているこの頃の私である。

そこで今回は、思い切つて七十五年前あたりにタイムスリップして、私が初めて病棟勤務という作業に就いた時の印象などを綴つてみたいと思う。

そもそも、私が園内の小学校の尋常科六年生を卒業したのは、十五歳になったときである。普通なら既に高等科をも卒える年齢に達していた訳だが、発病して入院までの二年半ほどの休学期間のせいで遅れてしまったのである。尋常科だけで卒業したのはもう一つ理由がある。それは松丘では尋常科五年生から高等科まで、一つの教室での複式授業だったから、何の事はない「門前の小僧習わぬ経を読む」で、尋常科で居ながら高等科の講義も受けた事になり、これ以上在学しても時間の無駄のように思えたのである。

小学校を卒業したからには少年舎の「若竹寮」に

そのまま居続ける訳にはゆかない。即、大人の部屋に転室となる。

そのときいち早く、七室ある健康室のうちの一室である「静風寮」三号の一戸室長がスカウトに現れた。少年舎の佐々木舎長とも懇意な処から話が進められたらしいが、私は「何としても『健康室』は嫌だ」と断った。何故ならその当時の「健康室」は「農園室」とも呼ばれ、最も軽症な若者達が野菜作りの農作業に明け暮れているのを目の当たりにしてきたし、もともと農家に生まれて畑仕事の大変さを身に沁みて分かっているだけに、私は「自由室に行きたい」と言い張って譲らなかつた。

そういう訳で、三室ある「自由室」の一つである「薫風寮」五号室に移して貰ったのであつた。自由室というのは、健康室が農業専門なのに対し、それ以外の作業を何でもこなす部署で、主に「炊事」「病棟や不自由室看護」「洗濯」「構内掃除」「除雪」「火葬」などの作業要員を提供する部屋であつた。

三十畳敷き大部屋に十二人が暮らして、昼間は大抵作業に出ているので割合静かなものであつた。その部屋に移つて十日間ほどは朝夕の掃除などや新し

い環境に馴染むことと、使い走りで過ごしていたが、いよいよ私にも人生始まつて以来の仕事と言うものに就く日がやつてきた。「病棟看護」の勤務である。その頃は各自が自分用の食器を納める「お膳箱」というものを持つていた。箱の中には井とか小皿や箸などを納め、箱の蓋をひっくり返すと食膳に早変わりという便利なもので、それを抱えての出勤は朝の六時と決められていた。三度の食事は職場で摂る事になつていたからだ。

職場となる病棟は、治療棟とは廊下で繋がれていて、公園の近くまで東西にかなりの大きな建物が同じ規模で並んでいて、北側が第一病棟、南側が第二病棟であつた。私の初勤務先は第一病棟であつた。

病棟は今のような個室など無くて、建物の中央に看護人のための八畳敷きの控え室があり、その東西が大きな病室には通路を挟んで十台のベッドが向かい合う形で二十台、東西合わせて四十台のベッドが配置されてあつた。

いつも二、三人分の空きベッドはあつたものの、肺結核や特に重症の患者がひしめいていた。それに

対して軽症患者の男が四名の看護人として働いていた。

その当時は結節型の患者が多く、爛れた傷口から発する病室特有の悪臭がたちこめて、とても一口では言い表せない悲惨な状況を呈していた。

それでも看護人には、作業着の支給がある訳でなく、履き物までもみんな自前の私服での作業であった。だから夕刻の午後六時半ころ、勤務を終えて自室に帰つて来ると「臭い、臭い」とよく言われて嫌がられたものだ。

病棟で看護人に支給されるのは、唯一白いガーゼのマスクだけだ。それも一週間に一個だけだから、掃除をしていると直ぐに汚れてしまうから、ときどき洗濯をして使っていた。作業賃も一日たった四銭しか貰えなかつた。

病棟勤務と言つても、まだ頑是無い少年の分際としては、一人前の仕事など出来る訳もなく、一つ一つが先輩たちの指図で動いているわけだから、気骨の折れることと言つたら大変なものである。

朝はまず病人の夜間に排泄した便器や尿瓶に溜めた汚物を処理室まで運んで捨ててから、炊事場まで

お湯を貰いに行き、それを天秤で担いで来て各自の洗面器に注いで回る。それが終わると今度はタバコ喫ませである。今のように巻きタバコではなくて、みんな貧しいから「なでしこ」という刻みタバコの時代だから、キセルに詰めて火を付けてやる。たいがい一度に三服ぐらいは喫むから、五、六人のベッドを掛け持ちしていると、朝食の配食となる。この間の朝食前の一時間ほどはまるで戦場のような忙しさであつた。

病人たちがベッドの上で朝食を摂っているうち、私たち看護人も控え室で急いで丼飯を掻き込む。のんびりお茶など飲んでいる暇はない。

作業の本番はこれからなのである。

ベッドの下のゴミや埃を掃き出して床板の雑巾掛けで一息する間もなく、病人たちの結節の破れた傷の包帯交換である。これが中々当時としては大仕事なのである。傷口が大きくなって化膿する恐れがあるものは、外科医の回診で処置して貰えるが、その他のものは皆、看護人の手で丹念に手当が施されるのであつた。結節の出来物が所嫌わず潰瘍となり、手も足も背中も腹部のいたる所の皮膚が破れての傷

口を消毒し軟膏薬を塗り、ガーゼで塞ぎ、包帯を巻けないところは絆創膏で止めるといった作業は、時間も掛かるが病人との会話が生まれる寛いだ時間ともなった。職員の看護婦は五人居たが、皆治療棟を担当していて病棟へは回診する医師に付いて来るほか全く姿を見せないから、すべての看護業務は患者作業で賄われていた。

だんだんと第一病棟での仕事にも慣れてくると、そこに暮らす人々のユニークな人の多いことにも驚かされた。

看護人控え室に寝起きしての住人である、看護長の前田爺ちやの病人たちへの思い遣りの深さには、新米の私のような者でも心打たれる事がしばしばであった。前田爺ちやは齢も六十歳を越えたばかりのよう、皆から爺ちやと親しく呼ばれていたが、なんと背中に大きな荷物を背負ったようなセムシに冒されて、部屋の中を歩くにも、膝行りながら移動するほどに異様な体系で不自由さが窺えたが、とても柔和な顔立ちで炉端にちよこんと座りながら、看護人にテキパキと指示を与えるにも、決して荒々しい口調は使わなかった、前田爺ちやは岩手県出身

で、すでに大正の初め頃に入院した人で、そのときは文盲であつて一丁字も読めなかつたという。大正時代の患者は大抵文盲の人が多かつたようで、二田さんに字の読み書きを教えられ、二田さんのことを生涯、先生、先生と呼び尊敬していた。

並んだベッドの入り口から三列目に佐野さんという病人が居た。彼は腸結核を患い排泄物が一番多くて、便器を満タンに溜めて置くので、捨てに行く時に零さないように気を付けるのが大変だつた。その佐野さんは山形県から来た齢も四十歳がらみで、若いとき「クスリ屋」に雇われていたとかで、薬の知識があるためか、内科医の久保田先生の往診があると、

「先生、今度は××を何グラムと〇〇を何グラムを入れて処方してください」とクスリの名を並べて頼む。すると、久保田先生は「うん、よし分かつた、分かつた」と言つて帰るのだが、久保田先生の処方には誰にでも何時も胃散か胃腸薬かのどちらかのクスリしか出してくれない。という評判がひろまつていった。なぜかと言うと久保田先生は、始めは保養院の看護手として勤めていたが、発奮して医師の短

期講習所で勉強して、医師の免許を取った人だと言う。大正時代は大学に行かずとも医師になれたという経歴の医師だった。だから投薬の範囲もそんなものだった。

佐野さんも久保田先生だけの対話にしておけば何事もなかったものを、次回の中條院長の回診のときもそれをやったから堪らない。

月に一度の院長の回診は、聴診器を患者の胸に何度も当てて、「フムフム」と独り呟きながら、ゆつくり時間を掛けて診察するのだが、この時の終わりになつて佐野さんは、久保田先生同様にクスリの名を挙げた注文に、「君は医者か？うちにはそんなクスリは無い！」と叱りつけ、足音も荒々しく病室を出て行かれた。

その有様を近くで見ていた私も、心臓が高鳴るのを覚え、看護長の前田爺ちゃんに報告したら、「またやらかしてしまったか、頭の良いのにも困つたものだ」と嘆いていた。

それから二週間ほどして佐野さんの容態が急変した。腸結核に効くクスリなど無い時代だ。前田爺ちゃんは長い経験から、「あーいう病人は腹が膨れた

り、足がむくんできたりしたら、もう長くは生きられないのだ」と教えてくれた。

そして、「ハーハー」と息遣いも荒くなつてきた佐野さんの細い腕に、急遽控え室に備え置きのカンフル注射を施してから、医局への報告を電話でするのであった。暫くして老いた喘息持ちの久保田先生が、これもハーハーと肩で息をしながら駆け付けて来て「病人より、わ(吾)の方が死にそうじゃ」と呟きながら、死期の迫つた病人の顔を覗き、深々と一礼して帰つていった。

久保田先生がベッドの病人に頭を垂れるのは、「もうこの患者はあきまへんよ」という無言の意思表示だという。

その頃は病棟看護は患者ばかりで行われ、一人の看護職員も病棟には入り込まなかつたから、緊急措置のカンフル注射器具一式も、常に病棟控え室に備えられていた。だから急患には患者の看護人があわてて注射器を用意してプスリとやったものだ。

私は一ヶ月ほどしてから、今度は第二病棟の看護に就かされた。第二病棟は、控え室の西側は空室になつていて、東側だけベッドを入れていたから、収

容する病人も第一病棟より少なくて、八、九人の少人数であったし、看護人も看護長の石川さんのほか二人で賄われ、私はその二人の内の一人であった。私より二歳年上の年内千太君が先輩で、第一病棟とは違った趣きがあるところを細かく教えてくれるので、とても働き易かった。

第二病棟は二組の老夫婦も混っていて、ベッドを並べていたりして、どちらかと言うと病棟というよりも、重い不自由舎の雰囲気を感じていた。

その中に独身者だが一番印象に残っている加集さんという老人がいた。昼間はいつもベッドの上につきちんと正座して、静かに新聞や雑誌または仏教の教本などに目を通して、飽きるということは無かった。頭髮は真っ白くて、何処となく気品のあるご隠居さま然とした老人であったが、看護長の石川さんから聞かされた処によると、加集さんは四国の高松に生まれ、若いとき北海道を渡り歩いているうち、極道渡世の道に嵌まり、道東の室蘭では子分を幾人も抱えるひと角の名前の通ったヤクザの親分だったという。

そうした前歴など微塵も感じさせない、鷹揚な優

しい物腰は皆からも好かれていた。

或る日突然、その加集さんに面会の男が現れた。印半天に烏打帽を被り、乗馬ズボンに雪駄履きという職人風の男は、加集さんのベッドに近づくと、いきなり床下に片膝立てて腰を浮かし、右の手を差し出して仁義の姿勢に入っていた。

「お控えなすって、手前発しまするは、北海道は室蘭に生を享けましたる、しがねえ野郎でござんすが、姓は山口、名は久米次郎にござんす。親分さんに於かれやしては長の病院暮らしにて、さぞかしご不自由もござんしようが、じかに親分さんのお顔を拝しまして……と感極まってか涙声で、ヤクザ界の作法で仁義を切る挨拶を続ける男に対し、加集さんは、「まア、堅苦しい仁義なんかはいいから、その椅子に座りなさんよ」と、ベッドの上から手で制して腰掛けさせた。

小説や映画の任侠ものでは、よく仁義を切る場面が出てくるが、実際に生の仁義を切る場面を目の当たりにして、私もいささか興奮を覚えたものだった。

男は若い時、子飼いの子分として世話になった加集親分に逢いたくて、函館から青函連絡船に夜の便

に乗り、今朝青森に着いたとかで、四キロの道を歩いて来たという。駅で買って来た弁当を二人で分けて合つて食べている姿は、傍目に見ても楽しそうで、五年振りに会いに来たという男は加集さんの病気を恐れる風もなく、室蘭の誰彼の様子などを話して聞かせたりして、二時間ほどして帰つて行つたが、涙を手で隠しながらの後ろ姿がいつまでも私の印象に残つた。

加集さんのベッドと通路を隔てて向かい側に二人とも目の見えない高橋さんという老いた夫婦者が居た。睦じそうに隣り合つたベッドに座つたまま、会話を交わしている姿は、ごく普通の病者の夫婦に見えたが院内では話題の老夫婦でもあつた。

高橋さん夫婦は、看護人の私たちが午前の掃除を終わりに包帯交換など決められた作業が終わると。そのあとお茶の時間になるのを楽しみにしていて、或る日お茶を注ぎに回つて、タバコにも火を付けてやると旦那の方が煙管の手を休めて、「お前さん歳はいくつになるの」と聞いてきた。「今年十五歳になりました」と答えたら、「婆さんや、うちらの子も生きていたら、丁度これ位に大きくなつてゐる年頃だなー」

と感慨深げに婆さんに話しかけた。すると隣りの婆さんは、「あの子も誰かに拾われて無事に生きていれば良いけどな」と感慨深げに言うのであつた。夫婦の間では何遍も同じ会話がいつも繰り返されてきたに違いないが、捨てて来た子供と同じ年頃の私を目の前にして、つい思い出を新たにしたものらしい。そして悔いと負い目の残る夫婦の過去をしんみりと話し始めた。

その高橋夫婦が院内で結ばれたのは大正十年頃で、まだ二人とも病氣の方はそれほど重症ではなかつたと言う。夫婦となつて暮らすうち、妻の方がいち早く妊娠してしまつた。その当時は産まれてくる子供を欲しくても、親たちの願いが叶うということは無かつた。例外なく臨月近くなると、墮胎の処置を受けねばならなかつたのである。

高橋夫婦は、どうしても産まれてくる自分達の子供が欲しかつた。そこで東京目黒の『慰廃院』に行けば、あそこは宗教の病院だから墮胎など許さず、ちゃんと子供を産ましてくれる、と言う事を聞いていたので、同じ部屋の者達に事情を告げて、「これから東京目黒の『慰廃院』に行くから頼む」と言つて、



夏の夜が暗くなるのを待って、夫婦はひそかに院の境の土堤柵を越えた。そのとき部屋の者たちも協力してくれて、土堤柵の所まで見送ってくれたという。高橋夫婦はその頃はまだ目は見えていたが、眉毛は抜け落ち、顔にかなりの結節も出ていて、おいそれとは汽車に乗れるような病状ではなかった。それで東北線の線路づたいに南へ南へと、夏の陽盛りの道を歩き続けた。

その時代の巷には療養所には入らないで暮らす、「行路病者」とか「浮浪患者」などと呼ばれて、物乞いをして暮らす患者達が大勢いたから、高橋夫婦も商店の店先などで、憐れみを乞いながら旅を続けたという。そして故郷の宮城県に入ると、わざわざ寄り道をして松島の「塩竈神社」にお参りして安産のお守りを授けて貰い、それを後生大切に荷物の中に入れて、何日も何日も歩く旅を続け、やつとの事で東京にたどり着く事が出来た。

高橋夫婦は、折角東京に来たからには浅草の観音様を拜んでから、明日は目黒の「慰廃院」に行っても遅くはないだろうと、観音様の近くまで行つたときだった。いきなり天地を揺るがす大地震に襲われ

た。建物は崩れ、あちこちから火の手が上がり、街中が阿鼻叫喚の坩堝と化した、あの『関東大震災』に遭遇してしまつたのだ。

夫婦は、とある大きなお屋敷が焼けずに残つていて、その大きな門の下に逃げ込んで身を寄せた。お屋敷では門の庇の下に集まつた避難者たちに、炊き出しなどして振る舞ってくれたりしたが、そこで妻が急に産気づいて苦しみ出した。そこに居合わせた夥しい避難者の中にも、同じような産婦も居て困り果てていたという。高橋夫婦はそうした混乱の中で男の児を産んだものの、どうして育ててゆくか、目指す目黒の「慰廃院」もきつと焼け落ちたに違いない、と早合点して、産まれたばかりの赤ん坊の首に塩竈神社のお守り札を掛けてボロに包まれた嬰兒を、どなたかきつと助けて育てて呉れる親切な人が現れるに違いない。と祈りながら、断腸の思いで震災の浅草を逃れて、再び又保養院に舞い戻る旅を続けたのだと言う。

「こんな病気でなかつたら子供の一人ぐらいいは育てて居たろうにな」と嘆く、高橋夫婦の思いに満ちた表情は、あれから八十年近い歳月が流れた今で

も私の記憶から消え去ることはない。

その高橋夫婦のベッドの並びに、盲人ではないが手や足の麻痺が進み顔も醜くなつてはいるが、とても仲睦まじい佐々木さん夫婦が居た。妻の方をユキさんと言つた。もう既に六十歳にもなるうか、この夫婦も数奇な運命の糸に操られたカップルであつた。

これは直接本人たちから聞いた話ではないが、院内では誰一人知らぬ者はいないほど、ホットな絆で結ばれた話題の夫婦だつた。

第二病棟を住まいとするからには、手や足の麻痺は勿論のこと、目が見えないとか、それとも歩けないか、と言つた状況に追い込まれての人達であつた。

なんでもこの佐々木夫婦は、同じ村に産まれての幼馴染みの間柄であつたという。成人してから二人は互いに好き合つて、やがて結婚しようとして約束が出来ていたけれど、その当時の農村（宮城県）の風習として、縁組みは親同志が決めるもので、年頃の娘を持った親たちは少しでも財産のある裕福な家に嫁がせるのに汲々とするのが例で、本人の意向などは無視される。ユキさんも泣く泣く他の家に嫁入りして行つた。

佐々木さんも他の人と所帯を持ち子供も出来た。

彼は四十代の働き盛りに発病しても農家の仕事を続けていたが、息子も娘も成人する頃、相次いでらしい兆候が現れて、三人一緒に収容されて来たのだという。

私の家の場合もそうであつたが、家庭内伝染による悲惨さは、数人にも及ぶところも珍しくない時代だ。佐々木さんの家族も例外では無かつた。佐々木さんが収容されて数年を経て、今度は彼が若いとき恋仲だつた相手のユキさんが発病して入院してきたというのである。

それで思わぬ再会を果たした二人は、お互い既に五十歳を過ぎてはいたが、頃合いを見計らつて一緒になつたのだと言う。それであんなに仲睦まじかつたのだと合点がいった。

青春時代にお互いが好き合つていながら親の意向で別れ別れになつた二人が、もし健康であつたらそのまま会う機会も無かつたらうに、殊更ひどい偏見と差別に晒される病氣のために、知らない北の療養所に送り込まれて来てみたら、そこにかつての恋人だつた人が先に入院していたなんてことは、世間に

そうザラにある話ではない。

病気を決定的に治すクスリも無い時代であつても何となく、心とませる佐々木さん夫婦の姿であつた。

第二病棟の看護長石川さんは四十二、三歳の長身の男で、仏教に深く帰依して毎朝仏壇に向かい読経を欠かさない篤信の人であつた。北海道の石狩出身で凄く温和な地味な人であつたが、午後の休憩時間になると、石川さんと同年配の友人の木村さんが一般寮から毎日のように控え室にお茶飲みに来る間柄であつた。

その当時は誰もが例外なく院支給のザラザラした木綿の着物を着ていたが、木村さんだけは裕も羽織も帯も銘仙仕立ての高価な着物で目立っていた。

それもその筈、木村さんは函館市の大店の呉服屋の息子さんだつた。

その木村さんの人生談義が始まると、聞く人を飽きさせなかつた。木村さんは若い時は放蕩息子で毎日茶屋遊びにうつつを抜かし、遊興三昧に耽つているものだから遂に親から訴えられて、裁判に掛けられ函館刑務所に二年の刑期を終えて出て来たら、今度はこの病気に罹り弘前市の「瓜田薬店」に治療に

行つた。そこは私設の治療所でもあつた。

「瓜田薬店」は階下で「大風子」の丸薬を作り、二階に数人の患者を寄宿させて治療に当たつていた。昭和の初期まで資産家の人々は「瓜田薬店」を利用した人は少なくないという。

木村さんはそこで同宿の患者で青森堤の遊郭の旦那で通称「一六」の親父と貴族院議員を父に持つ阿保さんという人と、三人で弘前の夜の街を荒らし回つたなどの話は世間知らずの若い私の耳には、何とも理解の届かない世界だつたが、その翌年に病気の重かつた木村さんの母親が亡くなつたとき、奇しくも私が火葬係作業に出されて、懇ろに釜焚きをした事も何かの因縁があつたのだろう。

私の病棟勤務は、ほんの駆け出しの少年時代に体験した事柄に過ぎないが、奇しくも私が昨年の本誌二号に書いた「弥助親方狂騒曲」に登場する親方の細君のヤエコと正月に殴り込みを掛けてきて、物議をかもしたヤエコの兄佐々木恵一は、この佐々木さんと一緒に収容されてきた息子と娘たちであつた。ということをつけ加えてこの稿の終わりとしたい。

# 短歌

## 白樺短歌会

### 独り善がりの歌並べ

滝田 十和男

荒縄にて庭木くくりて冬を待つ備えおさおさ人ら忙し  
冬囲い作業に励む人ら居て庭の賑はふひとときながら  
山裾の通りの老樹枝枯れて落とす落葉の少なくなりぬ  
丹念に掃き込められて清々し病友らの眠る納骨堂域  
働きて仕送り呉れし兄も姉も世に亡き今は誰に報ひむ  
若者の別れの如くハグをして遠来しひとの帰り行きたり  
歯ブラシの何度も手から落ちてゆき我が一日の朝は始まる  
麻痺したる脛吊り上げ貼りもらふ絆創膏の鬱陶しいこと  
縫いぐるみ抱え土産に訪ね来ぬわが誕生日覚えて呉れて

---

誕生日を心に留めて下されて訪ね来ませり師走さなかに

また一つ馬齢かねて生きてゆかむドラマチツクに程遠くとも

生き残りて独り善がりの歌並べ誌面埋づめる臆面もなく

泣いた顔笑ったように雪止みしばかりの空の晴れ渡りたり

常よりも遅く降りしにみるみるに積もりし雪のなかの新年

渋滞の車の列のいずれもが屋根に戴く雪のこんもり

立春の暦剥がすに降り止まぬ雪を嘆くは昨日の繰り言

犬逃げて探しに来たる飼い主と長話して短日は過ぐ

隣室の古老も冬は身を走る神経痛に苛まれをり

日に一度ポットに水を注ぎ足して沸かしたる湯の減らぬ独り居

聞かるれば六十五歳と戯れて言ふ学ばねばならぬ事の多くて

生かされて九十一歳三ヶ月われに為すべきこと想ひみる

## 最後の同級会に出席して

三 浦 喜美子

平成二十七年七月下旬猛暑の中、同級会の案内状が来ました。暑さに弱い私は、クーラーのきいた部屋でゴロゴロしており、食欲もありませんでした。このような状態では出席どころではありません。そんな中、友達より、

「去年は貴女達の米寿のお祝いをしたが、今年は十人のうち、私を含めて三人の米寿祝いがあるから必ず出席して！」と電話がありました。

私は暑さに弱いから欠席すると言ったところ、「八月下旬には涼しくなるから！待ってるよ！」と、一方的に電話が切れました。

八月に入って、出欠のハガキを出しました。勿論欠席です。すると今度は幹事より電話があり、

「具合でも悪いのか？今年最後の同級会になるので、

出席して欲しい」と言われましたが、欠席すると伝えました。

お盆を過ぎた頃より、朝夕少しづつ涼しくなってきました。『今年最後の同級会』の言葉が頭の片隅から離れない・よし、一泊で帰るなら大丈夫、と自分に言い聞かせて、早速往復の指定席を求めに駅に向かいました。

当日の朝は曇で涼しい風も吹いており、上着が欲しい位でした。発車の時には小雨も降って来ました。何時もだと車中より、流れる景色を眺めているのですが、今年はずっとお茶を飲んだり、目を閉じたままでした。

駅に着いたのは午後一時四〇分でした。三時の集合時間までには、まだ時間があつたので、駅の近くの喫茶店で軽く食事をとり、ゆっくり休んで会場に向かい

ました。もう既に皆さん揃っていて、再会を喜びました。

幹事の方が、今年は最後の同級会と思い貯金を全部降ろして来たので使い途を考えて下さい、と言いました。全員で十八名いますが、八名の方々は数十年前より欠席しています。みんなで分けたら、と思いましたが口には出しませんでした。

すると、「来年もこのメンバーで会いたい。続けて下さい。来年も皆さんと会えるかと思うと日々を楽しく頑張る事が出来る。」と言う人。

「皆さんの写真を部屋に飾って、每晚それを眺めて休みます。また続けて下さい。」

またある方は「同志会としたらどうか？」「いや、同級会の方がいい」などと賑やかに意見が出ます。

幹事の方は、「今年で私は辞めますから、誰かやって下さい」と言います。男性の方が、「私達も出来る限り協力してきた。今まで通りよろしく頼む」

「三浦さんもいつも遠い所来てくれてありがとう。来年もよろしく」と言います。

私は「乗り換えもあるし、ここの駅はエスカレーターが無いので、私には階段の上り下りが大変になっ

て来た。」と言うと、元気な友人は、「ゆっくりゆっくり時間をかけて来てください」と返します。

「猛暑の中、時間をかけると体が溶けてしまいます」と私が言った所、大笑いでした。

皆さんは毎年、家の前より会場まで送迎バスで来ており、猛暑なんて関係ないのです。

来年は来年の風が吹くでしょう……

男性陣が部屋に帰ると、女性六名はいつもの大部屋で、そこから楽しく賑やかな時間なのです。小学校高等科、受け持ちの先生四人の事、年二回の遠足の話など、面白く時間の経つのも忘れる程でした。

しかし、今年は違いました。息子夫婦、娘夫婦、孫の話に変わりました。私には縁のない話です。そこで私は、「今朝早く目を覚まし、道中疲れたので、申し訳ないけど先に休みます。」と言って床に入りました。私は床が変わっても、枕が変わっても、少しぐらい賑やかでも、すぐ眠りにつけるのです。

目が覚めたのは午前二時前でしたが、驚いた事にあつちでイビキ、こつちでイビキと、笑いを抑えてまた床に着きました。

翌日は快適な朝を迎えました。七時に朝食の会場に入り、八時半には幹事と副幹事が会計を済ませ十時に解散となりました。私は汽車の関係で九時五十分に出るように、フロントでタクシーを頼んでいたところ、幹事の方が来て、送ってくれると言うのです。驚きました。とんでもない、大丈夫です、とお断りしましたが、どうしても言うので甘える事にしました。本当は嬉しかったです。

その日も盛で涼しい風が吹いていました。二日間、汗をかくこともなく、無事に帰って来れたことで、喜びで一杯でした。

振り返って見ると、同級会は二十代、三十代は三年に一回、四十代、五十代は二年に一回となりました。

還暦祝いは、毎年行われてきました。

同級生は男三十名、女十八名でしたが、小学三、四年の頃、三人の男子は病で亡くなりました。高等科卒業後、両親の反対を押し切って一人の男性が志願兵として出征し戦死しました。

現在は男性八名、女性十名ですが、今のところ出席出来るのは男四名、女六名です。

去年、米寿の祝いで最後の同級会となりました。

忘れもしない昭和二十九年のお盆に帰省の折、私の為同級会を開いてくれました。あの時の感動は一生忘れません。保養園に入園して三年六ヶ月経った時でした。

当日、私は全く知りませんでした。急に電話が来て、迎えの人が行ったとのこと。私は慌てて断りましたが、無理矢理、単車に乗せられてしまいました。会場に着いたまでは覚えていますが、その後は頭が真っ白になりました。

あれから六十年。去年の同級会の時に当時の事を話した所、六名の方々が覚えておりました。

私を迎えに来てくれた方は、今入院中との事でした。治療中の私をよくぞ忘れず、嫌わず招いて呉れたと、改めてお礼を言いました。

その後、私の住所を聞きに行った所、父に「今は治療の身、退園したら招待してやって呉れ」と言われたそうです。初めて聞き、感動しました。

私が退園して三年目（昭和四十年）に同級会の案内状が来た時は、飛び上がる程嬉しかったです。



忘れもしない還暦の年は、新潟県にある弥彦神社でした。懐かしい一生の思い出の一つとなりました。数々の同級生の思い出は、私の宝です。

何時も同級生の皆さんは暖かく受け容れてくれて、一度だつて私生活の事は聞かれたことはありません。

世界一の悪病に罹った私を平等に行動していた。また来年も出席出来たらと毎年思い、案内状が来ると喜んで出席してきましたが、年一年と老化が進み、昨年最後の同級会とすることにしました。

もしも今年、案内状が来たら、今まで出席出来たことへの感謝の気持ちを伝えたいと思います。

優しい日本一の同級生に恵まれ、本当に幸せでした。

一般財団法人松丘保養園慰安会は…

## 一般財団法人松丘保養園松桜会

となりました。

長い間、園内外で親しまれてきた『慰安会』ではありますが、このほど新名称候補の投票を行い、『松桜会』（しようおうかい）へと名称を変更しました。

慰安会に引き続き、名称が変わっても、「ハンセン病問題の歴史等の啓発活動を行い偏見差別のない社会の実現に寄与すること」を目的に活動し、地域住民の皆様との交流活動や「松丘の森プロジェクト」による自然環境保全活動に貢献していくことを目標としております。

そのために、ある程度の財源の確保の必要性があり、賛助会員のご協力をお願いしております。

### 年会費

個人 1口 1,000円

団体 1口 5,000円

年度は四月一日から三月三十一日までとなります。

# 野の花の微笑<sup>ほほえ</sup>み

比良信治

(14) 恵子が保母となり結婚へ向かう

清水恵子の学校生活も終わりが近づいた。

彼女は白木園長のやさしい支援もあつて、青森保育専門学院の保母養成科を卒業できるようになった。恵子は青森の松丘園から休むことなく学校に通つた。勉強はむずかしかつたが、保育の実技では抜群に成績が良く、教師にもほめられる程で卒業できる。

そのためには、松丘園の経営する保育園にも園長先生を通じて、時間をつくつては助手として保育の子どものお世話をしていたからだ。八十人を超える保育園の園長や保母先生方の導きもあつて、自分の子どものような園児たちとまじわると、心がなごみ、希望がわいた。

遠い小樽の佐久間文太郎とは、日曜の午前十時頃に必ず電話で話しあうことにしていた。

恵子が学校のことを報告し、文太郎は、故郷に復帰した豊岡銀蔵の近況報告や、カトリック教会の様子を語りあつた。教会での神父による聖書入門の勉強会には、文太郎のほか二人の若い女性が参加し、この三月の復活祭に洗礼をうけるのは、文太郎を入れて三名であつた。その復活祭には必ず恵子も参加することを約束していた。

日曜日の電話は何時も長くなるので、文太郎の方から電話を掛けてもらった。そして、文太郎のお母さんの様子や伝言も伝えることにした。お母さんは腰痛がおこり、歩くのも腰をへの字に曲げるようになった。売店にもたまにしか行かなくなり、恵子は学校を早く帰る時には、市街地の市場によつてお母さんの好きな物をちよこつと買って帰った。

その年の三月の小春日和の日に、二十年も松丘園で務めた白木園長の退職記念お別れ会がもたれた。恵子

は入所者だったが特別にお願いして、職員末席に座らせてもらった。講堂の演壇の上に、「ご苦勞様でした。白木園長先生！」という、横一文字の看板がかか  
げられていた。

事務長の司会で、木村副園長が送別とお礼の言葉を述べ、総看護婦長と入所自治会横田会長から感謝の花束を贈られた。そのあと白木園長が別れの挨拶を述べられた。壇場に立つ園長の姿は少し変わっていた。少し腰が曲がり、歩くのも足をいたわるように左手で腰に手をあてて、ゆっくりと壇上にあがった。机に両手をつくと、何時ものように笑顔になり、職員に向って、「皆さん、何時の間にやら二十年もたちました。長い間わたしを支えて下さってありがとうございます。心より感謝申し上げます。この通り腰を痛めておりますので、わたしのお話したいことはお手許にさし上げた用紙にするしましたのでお読みとり下さい。どうも長い間ありがとうございます。どうか入所者の皆様を大事にして守って下さい。これがわたしのお願いでもあります。長い間お世話になり、ありがとうございます。」と、述べて壇上より降りると、総看護婦長が右手をとって支えるようにして退場されたのである。

恵子はその園長の退職の挨拶文を読んだ。実にその二十年間が、らい予防法を廃止し、新しい時代を迎える激動の時代を、女性園長はくぐり抜けてきた女偉丈夫の方であった。福島会の津出身の東大医学部を出たまねに見る医師である。常に病者の側に立ち職員の乱暴をいましてきた園長でした。

その中には、入所者が地域社会に常に発信していくように元気づけているが、現実はずしもそうでないと、園長は心配している。恵子も同感できるように、自治会は入所者の先頭にたつて、この療養所を改革していくように望んでいた。しかし入所者も高齢化し、合併症が多く、元気な入所者が少なくなっていたのである。自治会役員は男性が占め、女性に元気な人がいるのに、女性役員を働かせることがどこの療養所でも無かった。とくに毎日園の外に出ている恵子には、女性の役員が働いてもいいのではないかと思っていた。二十年という長い間女性園長が統治してきたことを考えれば当然なことながら、古いしきたりがどこの自治会も続いていた。白木園長はそのことを言いたかったのではないか、と恵子は思った。

恵子はそのことについて、文太郎との会話の中で何

時か触れてみると、彼は自分の老人ホームでも気がついていて、活発な明るい女性役員が進出していることを述べて、入所者自治会は遅れているのかもしれないと述べ、恵子と意見が一致したのである。しかし、恵子は学校にいく身で、自治会の役員は無理であったので意見を述べる程度であった。

ある日学校から下校しようとした時に、偶然に藤聖母園のシスターとかちあつた。同じバスに乗るので、名前を述べて話をした。シスター小板は札幌の藤学園のある修道会本部より来た方で、同じ学校で今春より宗教学の教師をつとめられていた。この春の園内にある教会のミサ礼拝でお会いしていた。シスターは青森の藤修道院に、札幌の本部より藤学園のシスター多田理事長がおいでになつていたのでお会いしてはどうかとすすめた。

青森の修道院はバス停の近くにあつた。隣に幼稚園があつた。修道院に入ってシスター多田理事長にお会いすると、にこやかなシスターは、小樽の富岡教会で佐久間文太郎に会つたというので驚いた。シスターが富岡教会に行った時に神父より老人ホームの方だと紹介を受けて話をしたのだという。清水恵子は、神様は

すべてお見透しなのだと思ひ、深く頭を下げた。保母の資格を取得したら、青森より小樽へ移りたいと話した。

小柄なシスターは微笑みながら、「小樽には教会運営の保育園もありますから、そこに勤められるといいですねえ」と、意外な言葉が飛び出したので恵子は内心びつくりした。

「働くことが出来ますように努力したいと思ひます」

「きつと春には職員募集がありますから、応募してみて下さいまし。それよりも住まいが変わるとお体に影響しますから、大事にして下さいまし」

優しい理事長先生だと、恵子は頭が下がった。

恵子は部屋より出て、初めての修道院のホームに向かった。ホームには、シスター小板さん達が待つていた。シスター五人の中に外国人のシスターもいらした。ドイツ本部より見えた方だと思つて、恵子は頭を下げて名前を述べた。

「初めましてマリア・ベルナデッタです。よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくお願ひします」

恵子は日本語の発音がきれいなので、こちらに長くおいでの方だと思つて、尊敬の心を深めて挨拶した。

そのあとに、そのベルナデッタシスターより、お茶をいただいて、恵子は恐縮してその顔をよく見つめると、母親のような慈愛に満ちたまなざしを受けて自然に頭が下がった。恵子はお茶をいただいて質問した。

「日本において何年になるのですか？」

「三十年になりますのよ」と、微笑まれた。そのやさしい青い眼が愛らしかった。が、内心長いので驚いた。

「早くからおいでになったのですね。感謝します。」

「どういたしまして。」

につこりと微笑んで、恵子の両手をにぎり握りしめた。恵子は何と答えてよいか、とまどつた。やつと「ありがとうございます」と、頭を下げた。

その夜は、恵子は施設のホームに帰ると、夜の七時すぎに、小樽の文太郎に電話して、シスター多田理事長とドイツ人のシスターにお会いした喜びを報せた。

文太郎もシスター多田理事長にお会いしたことを想い出し、藤学園の経営する施設も承知していた。恵子が勤める施設は決まつたわけではないので、この春の職

員募集の情報なるべく早くつかんで知らせることとし、専門学院卒業見込みとした清水恵子の履歴書を文太郎に送るよう依頼した。そのためには、内々就職担当の教師に相談して履歴書を作成しなければならなかった。

意外な訪問から就職のことがとび出して恵子は嬉しかった。何よりも就職先の事は白木園長先生にお知らせし、お礼を述べねばならないと思つた。園長先生が三月末に退任される迄にお礼を述べたいと願つた。

そのためには、恵子も文太郎の手引きによつて小樽に出かけて保育園の面接と試験を、遅くとも三月初めころ迄に終えることができれば幸いであると考えていた。学院の卒業式は二月末であるので、三月に入ると、何時でも出かけられるように準備しておきたい、と恵子は考えていた。

(つづく)

人事異動①

【退職】（平成28年1月31日付）

外科医師 岡野健介（弘前大学医学部附属病院へ）  
外科医師 長瀬勇人（弘前大学医学部附属病院へ）

【採用】（平成28年2月1日付）

外科医師 齋藤 傑（さいとう けん）（弘前大学医学部附属病院より）  
外科医師 須藤 亜希子（すどう あきこ）（弘前大学医学部附属病院より）

【退職】（平成28年3月25日付）

臨床検査技師長 杉本隆幸

【退職】（平成28年3月27日付）

副園長 江谷 勉

【退職】

事務長補佐 大角正光  
調理師長 竹内佳久  
副看護師長 葛西淑子  
看護師 相馬幸子（以上定年退職）  
副看護師長 古屋由美子（辞職）

施設管理係 佐藤篤徳  
看護師 加藤美智子

看護師 齋藤浩子

看護助手 小山内静香  
看護助手 石村敏子

看護助手 山崎亜矢子（以上任期満了）

（以上平成28年3月31日付）

【転出】

副総看護師長 丹藤由起子

（花巻病院副看護部長へ出向）

栄養士 庄司裕子（東北新生園栄養士へ出向）

【転入】

副総看護師長 近江谷留里子（おうみや りりこ）

（青森病院看護師長より昇任）

庶務班長 千葉弘伸（ちのば ひろのぶ）（帯広病院職員班長より転任）

副臨床検査技師長 工藤智木（くどう ともき）

（青森病院医化学主任より昇任）

栄養士 葛谷 聡（つたや さとし）（青森病院栄養士より転任）

# 人事異動②

## 【配置換】

事務長補佐 三橋守人 (会計班長より)  
福祉室長 桐原英一 (庶務班長より)  
会計班長 高山忠久 (福祉室長より)

## 【再任用】

調理師 竹内佳久  
看護師 葛西淑子 (短時間勤務)  
看護師 相馬幸子 (短時間勤務)

## 【昇任】

調理師長 西塚武美 (副調理師長より)  
副看護師長 雪田和子 (看護師より)  
副看護師長 佐藤桂子 (看護師より)

## 【採用】

看護師 長利綾美 (定員内職員)  
看護師 関美雪 (期間業務職員 パート職員より)  
看護師 長利弘美 (期間業務職員)  
事務補助 相内千恵子 (パート職員 施設管理係)  
看護助手 唐牛由紀 (パート職員 福祉室縫工部)

(以上平成28年4月1日付)

## 自治会日誌

### ○印 自治会

十二月

1日○青森県ハンセン病協会による慰問演芸会「伝統人形劇 金多豆蔵」

4日○第5回執行委員会

○弘前大学医学部学生3名来訪

○除雪業者(株)平岡建設・(株)クリーンサービスクラス青森、挨拶に来訪

5日 さくら保育園お遊戯会

9日○除雪作業員8名、挨拶に来訪

10日○甲田の裾編集局企画運営会議

14日○東北学院大学経済学部学生8名来訪、執行委員より聞き取りを行った

15日○年忘れお楽しみパーティー

17日 第11回園内教育研修セミナー「健康で長生きするために！」

講師：青森県健康福祉部長 一戸和成先生

21日○聖マリア幼稚園慰問

22日○真宗大谷派奥羽教区4名来訪

24日 イルミネーションツアー

28日○園幹部が年末の挨拶に来訪

○御用納め

一月中

4日○御用始め

○年詞交歓

5日○慰安会理事会（石川会長出席）

6日○施設整備委員会（石川会長、佐藤副会長出席）

14日○保健科運営委員会

18日○「慰安会」の新名称について、投票の集計作業に

執行委員2名立ち会い

21日○倫理委員会（叶経理委員出席）

22日 歌つこ広場

○第6回執行委員会

25日○第3四半期自治会会計業務監査（26日）

26日○慰安会評議委員会（佐藤副会長、叶経理委員出席）

” 「一般財団法人松丘保養園慰安会」から「一般財

団法人松丘保養園松桜会」へ改称

二月中

2日○長崎大学 平田教授、四天王寺大学 田原教授来

訪（入所者への聞き取り）

5日○第7回執行委員会

8日○真宗大谷派 本田氏来訪

12日 平成27年度院長協議会北海道東北支部総会（仙台、

園長出席）

17日○平成27年度国費予算説明

19日○藤保育園来園（歌・お遊戯）

21日 青森県ハンセン病パネル展（五所川原エルムの街）

22日○第8回執行委員会

○真宗大谷派奥羽教区との交流会

25日○倫理委員会（石川会長出席）

26日 歌つこ広場

27日 まなびの杜第1回 講師 ①ハンセン病専門医

尾崎元昭先生 ②元熊本現代美術館学芸員 藏座

恵美先生

29日 第12回園内教育研修セミナー

### 編集後記

日が長くなり、日中の日差しも明るく感じられる季節となりました。南の方からは桜の便りも聞かれるようになり、青森の桜の開花は4月の下旬頃と予想されています。

今年の観桜懇親会は4月28日。こんにち、高齢化と不自由度が一段と進む中であって、地域社会との交流の場でもある観桜懇親会。短い北国の春の桜を皆で楽しみ、交流を深めたいと思います。（佐藤 勝）



# 園内の出来事

聖マリア幼稚園慰問 平成27年12月21日



小さな子供達の一生懸命な姿に、入所者は元気をいっぱいもらってます。

藤保保育園成長およびこび会 2月19日



青森県ハンセン病パネル展 (五所川原市エルムの街) 2月21日



今年は職員5名で来場者に対応。50名余の来場者は、職員の説明に熱心に耳を傾けていました。

第2回まなびの杜講座 3月26日



第1部 弁護士 沼田徹先生  
「ハンセン病問題と法制度一人権の視点から」



第2部 入所者自治会 石川勝夫会長  
「ハンセン病療養所に生きて」

# 国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で107年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

## 所在地

青森市大字石江字平山十九

園 長 川 西 健 登

保有敷地 二三〇、五四八平方米

(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方米

(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方米

(一〇、九二〇坪)

## 交通案内

### □電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車

(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車

(車で約5分)

### □バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石

行き 共に松丘保養園前下車

### □航空機の便

青森空港より(車で約30分)

### □高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

### □なお保養園に隣接して桜の名所三

内霊園(1km)と国の特別史蹟指

定の三内丸山縄文遺跡や県立美術

館(2km)等があります。

## 発行所

一般財団法人 松丘保養園松桜会

## 所在地

〒〇三八—〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話(017)(788)〇一四五・〇一四六

発行人 川 西 健 登

編集人 甲田の裾編集委員会

## 印刷所

青森市本町二丁目十一—十六

青森オフセット印刷株式会社

電話(017)(775)一四三一—番